

千齒ごき——氏江市郎兵衛の話

(平成十年十月三十一日講演)

化政期から幕末にかけて生まれた佐渡人の中に、自ら描いた夢を実現すべく努力を重ね、のちに輝かしい足跡を残した人物は少なくありません。本荘了寛、松沢伊八、益田孝、柴田収蔵、氏江市郎兵衛……。

今日は、この中から「千齒こき」をつくり、北陸や関東方面に年間六〇〇〇丁も売り出した企業家、氏江市郎兵衛をとりあげて、幕末の佐渡の状況にも触れてみたいと思います。

氏江市郎兵衛——これは屋号でありまして、正確には本人は氏江市左衛門元彦といます。この人は、文化四年（一八〇七）、羽茂本郷（羽茂川の下流にひろがる村）に生まれました。その頃、村には三二六軒の農家と一一三町歩の田んぼがありましたから、佐渡では「大きな村」に属しておりました。羽茂に限らず「本郷」と呼ばれた所——たとえば吉井本郷、波多本郷、金丸本郷、五十里本郷などはみな大きな村でした。「郷」という単位は、お寺などが持っていた莊園（私有地）とは違って、国衙領（国有地）という中世の行政の単位だったので、ですから本郷という名のついた村は、かつて繁栄した大きな村だったという風にお考えいたゞくのが良いかと思えます。

市郎兵衛の家は鍛冶屋で、傍ら田畑をも耕作していました。当時の羽茂本郷には、鍛冶屋が五軒ありました。今は、農具鍛冶はすっかり不要になってしまいましたが、江戸時代までは「鍛冶屋」という職業は大きな利益が得られたものです。鉄は高くて、鍬一丁求めるにも、十日ぐらい働いてやっと買えるほどだったといえます。それで鍬の先がこぼれると、鍛冶屋に修理してもらって、何年も大切に使いつづけたわけです。市郎兵衛の家はこうした農具（とりわけ鍬）を作ったり、修理することを生業としていました。

皆さんは、勝手に鍛冶屋をやっていると思うでしょうが、実はそうではないのです。一八〇〇年頃から、「株」というものがありまして、鍛冶屋の株を貸したり借りたり、あるいは売ったり買ったりして鍛冶屋を営んでいたわけです。

ついでに申し上げておきますと、佐渡の鍛冶屋の親方を「頭取」と呼びましたが、江戸時代を通じて頭取をしていたのは、鍛冶町（現佐和田町鍛冶町）の中村清助家です。それで中村姓が鍛冶町に多くあるの

です。中村清助は「自分たちは河内丹南郡からやって来た」と言っていました。河内丹南郡（現大阪府南河内郡）といえば、日本の鍛冶屋の発祥地と言われる所です。相川金山の繁栄とともに彼らは大久保長安に招かれて佐渡に渡り、鍛冶町に住んで商売をしておりました。その頃鍛冶屋が二十軒、銕屋なま（金属のかんざしや金具などの細かい細工をする人）が四軒ありましたから、商売人たちが町をつくっていたことになりました。

さて、氏江市郎兵衛は二十歳のとき、江戸の御徒町に住む大慶直胤たけなほという刀剣鍛冶師の門を叩きます。

刀剣鍛冶を学ぶことは彼の夢であり、祖父の望みでもあったからです。

この当時、佐渡の一介の鍛冶屋の息子が簡単に江戸へ勉強に行こうと決意する——こうしたことは佐渡の特徴だったかもしれませんが、よその藩ですと、藩を飛び越えて江戸へ行ったり京都へ行ったりすることは難しいこととされていました。しかし佐渡は、天領であったために江戸とのゆききが制度上緩やかだったことにもよりましようが、島が十八世紀後半から貧しくなあって、他国へ出て稼ぐ必要が生じたことから、それゆえ人の出入りが容易になったこともあります。

そのほかに佐渡奉行所の役人が一年おきに、江戸に行っておりまして、江戸滞在中はヒマですから自分の好きな事を習うために先生を見つけて入門するんです。その先生が気に入らなければ、相性のいい先生を探せばいいわけで、自分で選ぶのですから文句のつけようがない。昔は不便だったから、そのような自由はなかった、などとお考えにならないで下さい。こうして役人自身が江戸に赴いたついでに気軽に「学ぶ」という慣わしがあったために、佐渡の庶民が江戸に遊学することに寛大であったのだろうと思います。江戸に勉強に行ったことが市郎兵衛の人生を大きく変えることになります。結果論からいいますと、彼は一〇年ほど修行したのち、天保四年（一八三三）に千齒こき職人として故郷に戻ってまいります。

皆さんは「千齒こき」というものをご存じですか？ 『和漢三才図会』ついで（寺島良安著）という本には、

次のように説明してあります。

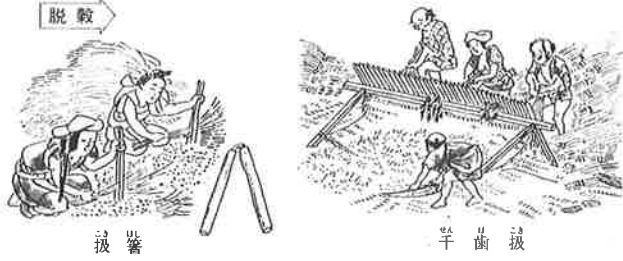
「正徳二年（一七一二）に千歯こきが作られた。台の裏に竹の釘を打って、そこに稲をひっかけて引くとモミが落ちる。そのはやは今までの十倍もあり、〈後家倒し〉といわれた。……」

「後家倒し」というのは、おわかりでしょうか？ 後家さんになると、自分で働いて収入を得なければなりませんから、脱穀に精を出します。それまで使われていた道具は「こいばし」（扱箸）といって、割箸のようなものにヒモをつけておいて、そこに稲を挟んで引くのです。どんなに頑張ってみても、大したことはありません。そんな頃に「こいばし」の十倍もはやい「千歯こき」が登場したのですから、後家さんは仕事を奪われてしまうというのです。

明治生まれの人に「千歯こき」でどれくらいできるのか、を訊いてみましたら、普通の人で一日に二三束とか。朝三時半に起きて夕方六時まで働き通しでできる束数だといえますから、気の遠くなるような話であります。今、コンバインを使えば数分ぐらいで終わってしまいませんか。

技術の革新というのは、今はじまったことではなくて、いつの時代にもあるわけですし、一方で新しい技術が生まれれば、一方で失業者が出るのは致し方のないことです。

ここで重要なことは、竹製の「千歯こき」という驚異的な文明の利器が他国では使われ、重宝がらわれていたにもかかわらず、佐渡には一〇〇年間も入ってこなかったということです。この驚くべき事実を、考えてみる価値があると思います。



（「日本史総合図録」山川出版社）

竹製の千齒こきが入らなかつた理由の一つは、佐渡では、冬の間稼ぐ仕事がありませんから、「そのンもんを買わんでも、春先まで手間はあつたがき」とみんなが考えたということなんです。

このような「手間ただ論」の考え方は、現在でも佐渡人が何かをするときに使いがちです。佐渡の人間同士にはわかりませんが、よその人と比べますとそう感じるはずであります。

千齒こきが入らなかつたもう一つの理由は、佐渡奉行所が他国の産物の買入れを制限したことなんです。それは他国に金銀が出ていくのを抑えようとしていたからです。だからたとえ、どんなに素晴らしい千齒こきが現れても、それを百姓に使わせて脱穀量を高めさせようという風には、役人は考えませんでした。

奉行所が、他国からものを買わせなかつたということは、逆に考えれば売るものがない国だったからでもあります。

ちなみに一七八〇年頃のことですが、新潟県でも一番貧しい藩であつた「村上藩」（本庄藩ともいう）の場合は、藩主みずから藩が潤うための積極策を練り、村ごとに「ものをつくること」を奨励したのです。その助言をしたのが、本多利明（一七四三—一八二〇）という越後、蒲原郡三条出身の経世家でした。国産の開発や海外交易などの必要性を提唱し、江戸で活躍した人です。やがて脆弱だつた藩の財政が潤沢になつたことはよく知られた事実です。

これに較べ、佐渡奉行の考えていたことといえは、「あと何年、佐渡にいたら長崎奉行になれるか」という類いのことであり、島民の生活が豊かになるうがなるまいが、奉行にとっては真剣に考えるべきことではなかつたのです。とはいつても中には島民のことを考える奉行もおりました。農作物の栽培に限っていいますと、たとえば、享保一七年（一七三二）に佐渡奉行として赴任した萩原源左衛門は、菜種など各種の作物を植えるよう指示しました。この人は、四年間佐渡奉行を勤めたのち長崎奉行となつて佐渡の干ナマコ（キンコ）を長崎に送らせ、そのキンコを中国に輸出させた人物でもあります。

もう一人挙げますと、一七九三年に赴任した奉行、大林与兵衛は、家の前にナツメや柿の木を植えるよう奨励しました。菜種を作れば、油が採れて他国へ売ることでもできると菜種栽培を指示したのです。

ほかに奉行ではありませんが、新しい商品を開発することに命をかけた人物がおります。皆さんご存じの「八幡芋」の生みの親、本間太郎右衛門という二宮、山田村の百姓でした。（萩原奉行、大林奉行、本間太郎右衛門についての詳細は「第二集―十八世紀・佐渡を動かした人々」をご参照ください。）

こうした一部の人を除いて、大方の奉行は島民が潤うことを考えませんでしたから、他国へ売るものがない佐渡の経済は貧しくなる一方でした。経済が貧しくなるれば、「ものを買うな」という消極的な思想につながっていきます。百姓たちは経済的に貧しくなった上に、考え方まで閉鎖的消極的になっていったことはいうまでもありません。天領ゆえの悲しさ、とでもいったらよいのでしょうか。

さて市郎兵衛ですが、三十八歳のとき再び上京します。その後京都にのぼり、菊華の御紋章を付けた刀をつくるという、鍛冶師としてはたいへんな栄誉を与えられました。

しかし市郎兵衛は京で一家をたてることもなく、故郷の羽茂に戻り、千歯こきを考案して売り出したのです。市郎兵衛の千歯は歯の並べ方に工夫をこらしたもので、中央がくぼんだ湾曲型になっておりました。この千歯で稲をこくと、稲の穂が穂首から折れる心配もなく、モミが一粒づつ分離されたので、それまでの竹製のものとは能率がまるでちがったのです。

私が「氏江市郎兵衛」をとり上げようと思ったのは、彼の発想の仕方がそれまでの佐渡人をはるかに超えたものであったからです。

まず、稻こきの切穂刃に使う鉄を出雲から買入れたことです。出雲鋼はつは当時、日本でもっとも質が良いといわれていたもので、市郎兵衛はこれをふんだんに使用するという、思いきった試みをしたのです。



（田中圭一著「天領佐渡」刀水書房）

この点は佐渡人らしからぬ才覚であります。さらに鋼を買い入れて焼きを入れるときには、弾力のある強い鋼をつくるためにアユの肝を使いました。こうした鋼の鍛え方は、彼の刀工の修行時代に学びとった

ものでありましよう。

市郎兵衛のつくった千齒こきは、「羽茂稻こき」として島内に売り出されて評判を呼び、佐渡の村々にいきわたると、こんどは他国へ売り出すことを考えたのです。この点もまた、それまでの佐渡人にはないスケールの大きさを感ぜさせます。千齒こきを他国へ売り出すには、他国のものと競争して勝目がなければなりません。市郎兵衛の注目すべきは、安くて良いものをたくさん作り出すために職人を集め工場をつくり、分業によって大量生産をし、単価を下げようと考えたことです。

はじめにも申しましたが、当時の鍛冶屋は鑑札をもつ者しかできませんでしたから、市郎兵衛は鍛冶株を買い入れる（あるいは借りる）ことによって職人を弟子にし、稻こきの大量生産にのり出しました。その数は一年間におよそ六〇〇〇丁。そのうち一〇〇〇丁を島内で売り、五〇〇〇丁を他国で売りさばいたといわれています。ちなみに一丁の値段は三貫文（一両が七貫文）。一両あれば米一石が買えた時代のことです。明治までに毎年五〇〇〇丁の稻こきが他国に売れたという記録が残っております。大体二千両のお金を佐渡にもたらしたことになります。

いったい市郎兵衛の「売り方」はどんな風だったのでしょうか。彼の販売方法は徹底しておりまして、川原田の商人に、一人に二五〇丁づつ持たせて各国を回らせました。ある人は越後へ、ある人は信州へ、ある人は上州へ行く。そうして一軒々々農家を歩かせる、という直売方式をとりました。

皆さんは、富山の薬売りをご存じでしょうか。おそらく市郎兵衛は、あの売り方に倣ったのだらうと思えます。同じ土地を同じ人間が訪ねるのですから、その土地の人との信頼関係が深まります。その上、千齒こきの具合いが悪ければ、いつでも新品と交換する、という保証書をつけました。

こうして商業における信用という問題を基本においた市郎兵衛の商法が実を結び、つぎつぎと販路を拡げ、やがて北陸一といわれる千齒こき会社にまで成長させたのでした。この千齒こきは、明治二十年頃まで東京でも売られていました。

市郎兵衛がすぐれていたのは、稻こきを作るのであれば、「日本で一番いい商品をつくらう」と目標を高く掲げたことです。さらにそれを自分の故郷、羽茂本郷村で実践したことでしょう。江戸や京都で学びとった新しい技術を佐渡に持ち帰り、工場制手工業を営んだのですから、市郎兵衛は佐渡の遅れを一気にとり戻すことができたのでしょう。

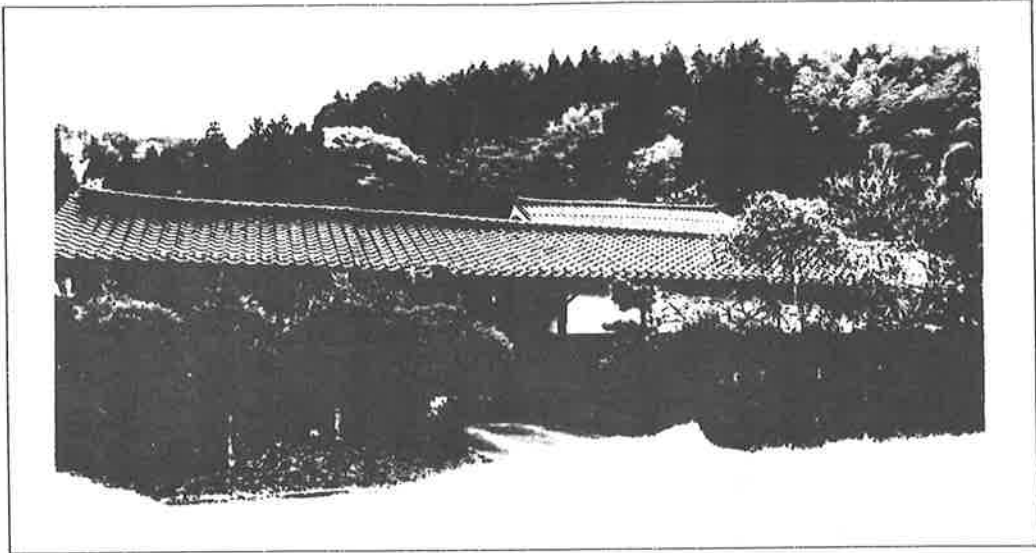
他国から学んだ新しい技術や経営で、自国の存立を計ろうとした市郎兵衛の気風は、今日の羽茂人に連綿として受け継がれているのです。

さて氏江市郎兵衛の千齒こきがさきがけとなって、この頃から佐渡の特産物が生まれます。皆さんは「なぜある商品が特産物となり得るか」について考えたことがありますか？

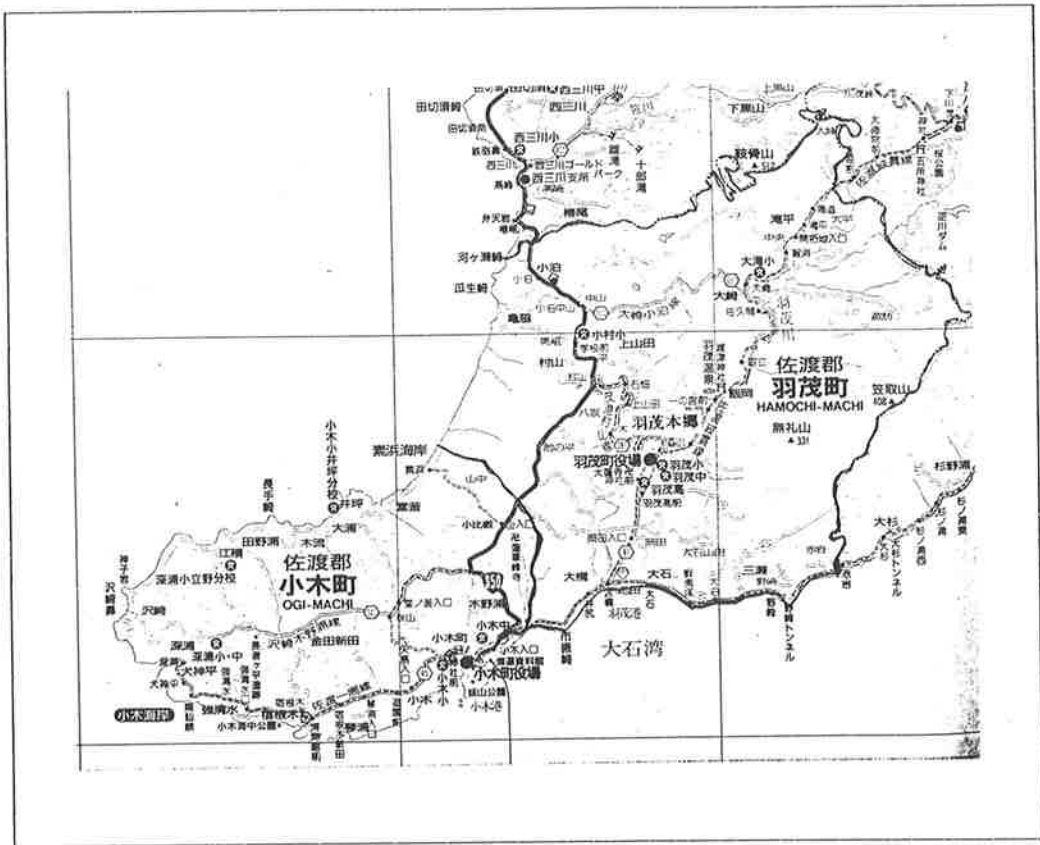
たとえば小千谷や越後などで織り出される、麻の独特の風合いをもつ織物「ちぢみ」がありますね。このちぢみが、たった二つの理由から江戸で評判を呼ぶ特産物となりました。「冬に手間をかけて織ること」と「雪で晒すこと」です。つまり、ちぢみ織りには冬の湿度がよく、夏に織ったものでは品質の高いものはできません。また、しば寄せをするには「湯もみ」とか「足ぶみ」をして、雪に晒すのが一番なんです。ここで大切なことは、とかく私どもは、その産物がその土地に適していたからだと短絡的に考えがちですが、それだけでは特産物にはなりません。麻の産地だから麻織物が特産物になったのではないということです。麻は木綿と同じように各地で織物にされていたのですから。いま申しました二つの条件が加えられることによって、つまり、ひと工夫されることによって「ちぢみ」は特産物となり得たのです。そうでなければ、減じております。ちなみに麻の織物は江戸時代から武家の正装用として袴はきもなどに使われてきましたから、その需要は大変多かったのでしょう。

いま、佐渡の特産物といえば、おけさ柿、佐渡味噌、竹細工です。そのうち「おけさ柿」について少しお話してみます。





氏江市郎兵衛の生家 (『国説佐渡の歴史』郷土出版社)



柿は日本の風土に適しているのでしょう、青森から九州までよく育ちますね。じゃあ、なぜ数ある柿の中で「おけさ柿」が特産物となり得たか、ということ。これには何人かの人たちの、柿に対する並々ならぬ執念があったからというほかはありません。

羽茂の若林さん、中興の小松さん、沢根の土屋さん、西三川の佐々木さんほかの方たちの、長年にわたる努力の賜ものでありましよう。

柿はつぎ木をしても、すぐには実りません。「桃栗三年、柿八年」といわれるように、収穫までには数年かかります。私は羽茂の若林家の柿園を訪ねたことがあります。若林さんが八珍柿はちちんをつぎ木したのは昭和八年でした。穂木は山形から取り入れたそうです。八珍柿は渋柿ですがタネがなく、焼酎でさわすと独特の甘みが出る——という加工法を農事試験場員から教えられて、村の人たちとともに育成に情熱を燃やしたのです。「おけさ柿」の登場であります。

戦争中は、砂糖がなかったのでその代替品としても人気があり、質より量を求められました。ところが困ったのは、終戦直後の食糧不足のころだったといえます。若林さんは村役場から「柿の木を切って里芋を作れ」といわれたとき、「柿の木は二十年育てて来た、私の大切な命です」といって、その信念を貫いたそうです。もしそのとき柿の木を切っていたら、おそらく私もこう言うでしょう。「柿のようなものが売りもんになるかさ」。

若林さんのほかの皆さんにも、それぞれ頑固に柿の木を守り育てた一念があったことと、柿の需要の大きかった札幌市場を狙って島外に売り出すという羽茂農会の人たちの発想があって、「おけさ柿」は特産物になり得たのだらうと思います。

ほかにもいろいろな果実の栽培を試みましたが、結実するには至りませんでした。あとひと押しおしの工夫や努力があったならば……。さらに個々に励むのではなく、村々の力を合わせ組織化して事に当たっていたならば、第二、第三の「おけさ柿」が誕生していたかもしれませぬ。そうならなかったのは、佐渡人氣質のなせるところでありましよう。

氏江市郎兵衛が活躍する少し前のことになりますが、田中葵園という奉行所広間役がおりました。佐渡で最初の学校「修教館」をつくったことで知られる人物で、独特な発想の持主でもありました。享和二年（一八〇二）に佐渡が大地震に見舞われて、小木の土地が少し浮いたことがあります。「その浮いた土地をどのようにしたらよいか」と問題になりました。「田んぼにすべきだ」と主張する人の多い中で、葵園は佐渡奉行所から意見を求められて提案しました。

「遊廓にすれば、他国の人が遊びに寄って来て、銭を使う。そうすれば店屋みせやに人を雇うこともできる。なにも躊躇ちゅうじゆすることはないじゃないか」と。

この案が採用されて小木に遊廓ができることになったのです。ちなみに田中葵園の下に益田丹右衛門という人がいましたが、三井物産の育ての親、益田孝の祖父に当る人です。生産物奨励策の担当者として腕をふるった益田丹右衛門（2代目丹右衛門で、本名は忠助）のあたりで、佐渡奉行所は施策の大転換を計ったのです。特産物を持たない貧しい国に新しい時代を創る思想が生まれたのです。

佐渡の人間が、どうしてこのように大きな夢を描くことができたのだろうか。それは十八世紀の貧困にあったのでは、と私は考えています。

（了）